

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
『氣鋭の四歌人』が輪番で執筆する特別企画

20世紀 歌人群像

19

岡井隆

花山多佳子

問もなく21世紀。近代短歌から現代短歌へ……
短歌はこの一〇〇年でどのような足跡を
残してきたのだろうか。
この時代を生きた歌人にスポットをあてて
20世紀の短歌を検証する。

第一章

人と時代

岡井隆は昭和三年一月五日、愛知県名古屋市中で生まれた。父、弘、母、華子の長男で、父母ともにアララギの会員であった。愛知県立第一中学卒業後、昭和二十年旧制八高の理科に入学。終戦後の秋、高校の休校中、家族の疎開先の三重県の農家に暮らし、歌をつくり始める。十七歳のときである。翌二十一年、アララギに入会、土屋文明の選を受け、誌上に作品が載る。

昭和二十五年、二十二歳のとき上京し、慶応大学医学部に入学した。翌二十六年、「未来」創刊に参加する。「未来」は、当



時三十八歳の近藤芳美を代表者として、若い知識人、学生、療養者中心に創立された、アララギ内の同人誌的集団である。岡井隆はその中心メンバーとして編集に携わり、歌とともに評論、エッセイ、詩歌論など、先鋭な文筆活動を始めた。

三十年、大学を卒業。二十七歳。この頃より、現代詩的なモダニズムの手法をとる塚本邦雄に注目し、交流が始まる。三十一年四月、北里研究所付属病院の医局に内科医として就職した。同年十月、十九歳よりこの年までの九年間の歌を収録した第一歌集『斉唱』出版。

三十二年、「短歌」と「短歌研究」の新年号に「ナシヨナリストの生誕」三十二首、「思想兵の手記」五十首を発表。またこの年、「短歌研究」誌上で吉本隆明と四回にわたって論争する。短歌外ジャンルと実作者の間で、初めて定型論に踏み込んだ議論となり、注目された。この頃より六十年安保時代を挟んで、歌壇は前衛短歌運動の最盛期となり、岡井は塚本邦雄、寺山修司とともにその中心的存在として、テーマ製作、評論、座談会など精力的な活動を展開した。三十六年、第二歌集『土地よ、痛みを負え』出版。三十八年、俳人の金子兜太との共著『短詩型文学論』（紀伊国屋新書）を出版、短歌の韻律を緻密に分析、理論化した画期的書となった。三十九年、歌集『朝狩』、四十二年、『眼底紀行』出版。

四十五年、引き続き作品、評論活動旺盛な中、七月、家庭、職場、短歌活動一切を放擲して失踪する。四十二歳。九州宮崎

市に住み、十一月、福岡県遠賀郡岡垣町に在住。福岡県立遠賀病院に勤務。この年より五年間、作歌を中断。斎藤茂吉を読みながら、日記や考察ノートを記す日々を過ごす。

四十八年、歌壇に復帰。四十九年、九州を離れ、愛知県豊橋へ転居。国立豊橋病院に勤務する。五十年、失踪前の作品と、再びつくり始めた歌を収録した歌集『鶯卵亭』を出版。歌数は一三七首と少ないが、待望の歌集であり、注目された。五十一年、長く病んでいた母死去。

その後、昭和五十年代に歌集『天河庭園集』『歳月の贈物』『マニエリスムの旅』『人生の視える場所』『禁忌と好色』（遼空賞受賞）を出版。評論、エッセイ集など多数著す。五十五年、父死去。五十八年、再び『未来』編集責任者となる。六十年代には歌集『αの星』『五重奏のヴィオラ』『岡井隆全歌集Ⅰ・Ⅱ』『中国の世紀末』を出版。

平成元年、国立豊橋病院を退職して、京都精華大学文学部教授に就任。歌集『親和力』を出版し翌二年、第一回斎藤茂吉文学賞受賞。東京・三鷹市に仕事場を借りて住む。三年、歌集『宮殿』刊行。四年、歌会始の選者となり、物議を醸した。六年、文章を収録した『岡井隆コレクション』全八巻を刊行。歌集『神の仕事場』出版。八年、武蔵野市に家庭をもち移住。平成十二年現在までに歌集『夢と同じもの』『ウランと白鳥』『大洪水の前の晴天』『ヴォツェック／海と陸』がある。十二年、監修をつとめた『岩波現代短歌辞典』が刊行された。

第二章 歌と時代

岡井隆は終戦後の秋に十七歳で歌をつくり始めた。まさに戦後と同時に出発した歌人である。昭和二十年から三十年まで、その育成期は、戦後アララギとともにあった。師の土屋文明、先輩の近藤芳美の影響、そして同世代の人々からの刺激を受けながら、第一歌集の『斉唱』は、多感な青年時代の生活や恋、社会的関心を抒情的かつデッサン力豊かに写し取っている。

三十年代に入ると、写実の限界を感じ始めていた岡井は、塚本邦雄の影響を受けて、喩法を導入した抽象化によって、思想

や社会状況を歌うようになる。そうした反写実的

方法は、短歌の表現領域を拡大し、前衛短歌運動として三十年代を席捲した。『土地よ、痛みを負え』

『朝狩』『眼底紀行』がその時期の歌集である。しかし『朝狩』のあたりからは、歌の調べ、韻律に対する意識は強くなっており、重装備した歌とは違った美しさが見られる。『私のめぐりの葉のみく



「未来」の夏期大会（名古屋）52～53年ごろ。前列、右から2人目岡井、後列、左から吉田漱（故人）、近藤芳美、高安国世（故人）の各氏。



追空賞受賞記念の会（82年10月）後列、右から近藤芳美（メガネの人）、岡井、篠弘、塚本邦雄の各氏。

辞を駆使して詠み込んでいく。昭和五十年代後半の『禁忌と好色』から六十年代初めの『五重奏のヴィオラ』あたりで、平明な落ち着きを見せ、或る到達を感じさせたが、平成に入ると、またさまざまな言葉の実験で、読者を驚かせた。口語の自在な導入、（一）の使用、「叱つ叱つしゆつしゆつしゆわはらむまでしゆわはらむ失語の人よしゆわひるなゆめ」（『神の仕事場』）といった音のみの意味不明な歌など、現代の言語状況の最先端に遊ぶ。

歌集は現在までに二十冊を数える。時代ごとに変化する作風のなかから、わずかながら鑑賞してみたい。

きやかに世界昏々と見えなくなりつ」といった、六十年安保後の喪失感が、一種ヒロイステイックな悲哀を湛え、颯颯と歌われている。

一つの時代と、精神と愛の終末を濃く感じさせながら、四十五年失踪した岡井隆は、五年後『鷺卵亭』で復帰する。「ホメロスを讀まばや春の潮騒のとどろく窓ゆ光あつめて」は九州での歌。鋭さや硬さを脱して、短歌の様式に自らを解き放つ欲びが感じられる。復帰後の岡井は、主題を歌うといった構えは捨てて、私生活に引きつけた折々の想念や意識を、卓抜な修

灰黄の枝をひろぐる林みゆ亡びんとする愛恋ひとつ

「齊唱」

第一歌集『齊唱』の冒頭のうた。『齊唱』は初期の作品群を最後に置き、あとは製作順に並べる構成をとっている。この冒頭歌は二十八年、二十五歳のときの作。全体には戦後アララギのリリズムのタッチを残す『齊唱』のなかで、写実を踏み出そうとする姿勢の明確な歌である。「みゆ」と上で叙景を提示して、下に主観を対置する。主観と言っても、「亡びんとする愛恋ひとつ」なんてやたらキマった、気障なほどかつこいいいフレーズだ。「灰黄の」という叙景らしからぬ初句の硬さと色合いが、「愛恋ひとつ」を甘くせず、沈痛な表情を一首に与えている。こういう「型」の雄々しさ、美しさが岡井隆の歌の一つの特徴で、愛唱される所以である。この歌の次に「果肉まで机の脚を群れのぼる蟻を見ながら告げなずみにき」があり、こちらの方は、歌の表情がだいぶ違う。「果肉まで」と「告げなずみ」は或る意図を感じさせながら、その場の「群れのぼる蟻」と心理状態の交錯はリアルで生々しい。

海こえてかなしき婚をあせりたる権力のやわらかき

部分見ゆ

「朝狩」

昭和三十八年、安保闘争三年後に「短歌」に発表された連作「婚」の冒頭の歌。「かなしき婚」は日米安保条約を比喻している。どちらが男か女かははっきりしないが、日本権力の方が女で、その「やわらかき部分」と解釈出来る。あるいは、双方の

（岡井 隆）

権力の下部構造ということかもしれない。国家、男女の欲望、打算、制度の構造のうとましさ、同質のものとして重ねて歌われる。『土地よ、痛みを負え』から見られたこういう、だぶらせ方は、社会詠の方法として影響を与え、かなり流通するものになった。岡井隆の歌人としての名前が突出したのは、まず政治や思想を比喩的に歌う方法によってであった。

ひぐらしはいつとしもなく絶えぬれば四五日は

〈躁〉やがて暗澹

「鶯卵亭」

復帰の歌集となった『鶯卵亭』より。ひぐらしの声の推移にも、感情の起伏が惹きおこされるような、いかにも世間から隔絶した生活の感じがある。斎藤茂吉の『赤光』の「蜩のかなかなかと鳴きゆけば吾のころのほそりたりけれ」にも重ねているのだろう。茂吉の歌は若さの感傷だが、この歌は若さの過ぎた、わびしさ、苦さが滲む。「四五日は……やがて」という三人称的な感情叙述が、自分の状態を外から描いたようなタッチで、妙に調子が良い。「暗澹」と「ん」止めの結句が、落ち込んだ底を感じさせるなど、実に技巧に富んだ歌でもある。

春あさき日の斑のみだれわが佇つはユーラシアまで

昔海底

「マニエリスムの旅」

『鶯卵亭』以後、歌の意味よりも、韻律やかたちに最も傾斜した時期の作である。出だしから口をつくまま、流れのまま、といったつくり。「わが佇つは」という型のはめ方など巧い。地上の「日の斑のみだれ」から、海を想起し、「ユーラシアまで」と

予想外に遙けく拡がつていく。「ユーラシア」は岡井の歌にはよく出てくる。大陸への憧れや、複雑な想いとともに、この語の美しさを好んでいるのだろう。「海庭」は、「海底」の垂直性でなく、空間的拡がりをもたせるための造語であろう。

『マニエリスムの旅』から、岡井は歌にさかんに「詞書き」を付ける試みをやっている。それ自体が別の歌になっていることも多い。この歌には「想像は飼ふべし空想は除くべし。北村透谷二十四歳。」という詞書きが付いているのだが、散文のようで歌にも読める。透谷の言葉は実際は「想像は養ふべし。空想は剪除すべし。」で、微妙に変えたところが面白い。歌との関係は、読者が自由に鑑賞すればいいのである。

夕ぐれの大地に独楽を打ち遊ぶくれなるのひも湿り帯びたり

「禁忌と好色」

五十代前半の作。「家族抄」という連作の最後の歌で、冒頭が「しづかなる旋回」のち倒れたる大つこもりの独楽を見て立つ」とやはり独楽の歌になっている。この時期、岡井は父を失い、また、過去から引きずった離婚調停が解決を見る。長く心の葛藤であり禁忌であった父と女への想念が主題の連作である。「独楽」は父を表わしているようだ。こういう岡井隆自身の私生活上の状況や想念を、読者は読み取らざるをえず、またそれが、読みの魅力であるというふうになってきたのである。

この歌も、だから「くれなるのひも湿り帯びたり」は写真ではなく、束縛するもの、家族の紐帯の湿りを暗示しているのだろう。また、ちよつとエロチックな感じもある。しかし、そん

なふうには読まなくても、独楽の歌として味わえるし、その方がいい。ダイナミックな上と、微細な下との落差に魅力がある。

もう何か大いなるコトを書きしるすには日向への愛が足りない

「神の仕事場」

平成に入って『親和力』あたりから、様式や格調を突き崩すように、口語調、言葉遊び、現代用語などの駆使が目立ち、『神の仕事場』でその頂点に達する。サブ・カルチャー（若者文化）の現代言語状況を反映するものだが、ここでも岡井隆の過激さは尖端を行っている。そういう自分の状況そのものを、この歌は吐露している。「コト」なんていうカタカナ表記も、今風だ。詞書きに「僕の村は戦場だった」（タルコフスキイ）とはいへない。」とある。「僕の国は」といいかえられるのだろう。「大いなるコト」はナショナリズム（国家主義）のようなことでもあろうか。「日向への愛が足りない」というようなコピー（宣伝文句）的なフレーズが、フィーリングとして最も伝達力をもつ時代であることを、岡井はよくわかっているのである。

たびゆけば膝のふかさにあきのくささきみだれたれ

「ヴォツエック／海と陸」

平成十一年の最近歌集より。短歌の韻律が心地良く流れ、「修辞のやうだ」で位相が転倒する。秋の草のさきみだれ方が「修辞」のやうというのは、実際の景色を「絵」のように美しい、というのと同じ転倒だが、すでに上での表現が十分修辞的であるので、事物は二重に遠ざけられる。どこまで行っても修辞で



オランダにて（2000年6月）

（第三章）

短歌史におけるポジション

ある。この歌の前には「どの桃もおなじきかをりとはいはずたとへば違ふ夜と昼ほど」と言う。同じかおりなんて言えないよ、とクギをさしておいて、「夜と昼ほど違ふ」という慣用表現で落ちをつけてみせる。言葉とイコールでありつづける岡井隆の愉悦と虚無感^{えつ}は、つねに同居しているようだ。

昭和三十年代に塚本邦雄や寺山修司とともに、前衛短歌運動

の旗手として登場して以来、現在まで、岡井隆は、つねに最も注目され、影響を与え続けている歌人といえる。一つには、若い頃から、作歌と並行して、理論、評論、エッセイ、時評などを精力的に書き続け、その現代的視野や尖端性の魅力によるところも大きい。「いちごっこ」と自ら言うように、岡井隆の歌とさまざまな言説は、交錯しながら「岡井隆」という磁場をつくって、時代を先取

（岡井 隆）

りするように動いてきた。歌自体も精神活動の一環であり、一定の完成をめざすものではない。それが、きわめて現代的といえるのである。

前衛時代に政治や社会といったテーマを表現するために導入した比喩や修辭を岡井隆は、ずっと手放さなかった。テーマを歌うことをやめて、短歌の韻律やかたちを先行し始めるにつれて、むしろ方法としての修辭は磨かれていった。現代詩の技法のみならず、古典和歌の修辭も含めて。同時に、アララギで育った岡井隆は、自己や実生活に沿って歌うことに立ち戻ることによって、抽象化の固定を回避した。従来は、私を歌うことと、比喩などの技法を駆使することは相容れない行き方であった。その二つをドッキング（結合）させることで、自在に歌い続ける方法を掌中のものにしたといえる。例えば、佐藤佐太郎のように、純粹に限定していくのとは逆に、なにもかも入れ込んでいく、トータル主義である。

現代人としての折々の想念や意識、知が、巧みな修辭で歌い取られるが、そうした想念や意識も言葉によって際限なく生み出されてくるものなのだ。私というものは、すでに前もっては存在しない。それほど言葉と岡井隆は一体化している。歌人としての岡井隆の到達というものもない。現在の時代の言葉に密着しつつ、次代の言葉にどう触手をのばすのか、まだ予断を許さない。

（はなやま・たかこ「塔」会員）

※次号は馬場あき子（加藤治郎筆）です。